フィールド（現場）からの風 ㊷

宮田守男

5月は、田んぼに早苗を植える月という意味の「早苗月」が詰まって「さつき」になったという説が有力な皐月（さつき）。農作業も本格的になってきた。2日は立春から数えて八十八日目の雑節「八十八夜」で、この頃から霜が降りなくなる「別れ霜」の時季、農作業を始める吉日でもある。「八十八」は「米」と言う字になるのも深い縁を感じる。

近年自然を楽しむ傾向を、松山東雲女子大名誉教授で理学博士の石川和男さんが「自然界には不規則な『ゆらぎ』がいくつも存在する。私たちが自然の中で落ち着いたり、心地よさを感じたりするのは、このゆらぎがあるからだ」と自然の中に出向く事を勧めている。咲く草花や、自家用野菜を楽しみに、好みの種を蒔きプラス思考を高めたい。

移動制限や行動自粛の要請が無い大型連休、テレビ放映で全国各地のにぎわいが伝わってきた。これまで直面した多くの出来事で「辛い」日が続いていたが、映像からは、「幸せ」が近いと期待をしたい。

自然界のリズムの大切さが求められている

群馬県みどり市の富弘美術館で鑑賞した星野富弘さんの詩「幸せ」の一節「辛いという字がある　もう少しで幸せに　なれそうな字である」を思い出す。星野さんは、中学校教諭のときクラブ活動の指導中に不慮の事故で手足の自由を失い、9年間の入院中から、口に筆をくわえて文や絵を書き始め、水彩の詩画を通して生命の尊さ、やさしさを伝えている。数々の詩画や随筆は観る側の心に届く作品である。

「1／fゆらぎ」（エフぶんのいちゆらぎ）と言う言葉は自然界にあるリズムで、森の中での散策や、海辺での波の音などの自然な音を聞くと癒やされるとの研究結果もある。ストレス社会の中で、木々の間を抜ける風や鳥の鳴き声、木漏れ日や川のせせらぎなど体験できる環境がますますお客様に訪れていただける資源なのだと認識することや、環境保全が大切だと考える。

ウクライナでの悲惨な死者数の現実、知床での海難事故での犠牲者の報道を聞くたびに、アルフォンス・デーケさんが説く家族を失った人に掛けてはいけない言葉を思い出した。悲しみの底にいる人が有難いのは、黙って話を聞いてくれること。道で出合っても何も言わず深々とお辞儀をして、いたわりの気持ちを感じる。細やかな気配りに勝るものはないだろう。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）

木漏れ日が道端のカタクリを輝かせる